

高三選択「漢文講読」

——『報任少卿書』の授業実践——

加藤 昌 孝

はじめに

国語科においては、「国際化・情報化」社会に適應すべく「表現する力」や「伝え合う力」の強化・育成が要請されており、従来熱心実践されてきた文学教育は、「文学的文章の詳細な読解に偏りがちであった」^①とされ、その価値は否定される傾向にある。教室の中で、互いの読みの交流・対話による自己と他者の相対化、主体性確立といった、文学教育がこれまで長きにわたって培ってきた財産は否定されようとしている。国語科の中では、とりわけ古文（日本古典）や漢文の授業は、切り捨ての対象となりつつある。その点を現代版「焚書坑儒」とするのは言い過ぎであろうか。古典や漢文の豊かな世界を若い世代に手渡すことは、今日、本当に無価値なのであろうか。現在盛んに喧伝されている「皮相上滑り」^③の「国際

化・情報化」に抗すべく、生徒たちと取り組んだ「漢文講読」の授業、「報任少卿書」の授業実践を報告したい。

今時古くさい「化石」のような授業実践であるかもしれない。ご批判、ご検討をお願いしたい。

一 『報任少卿書』の教材化にあたって

司馬遷の『史記』は名高い。が、同じ作者の『報任少卿書』はあまり知られていない。

十数年前から学校を去る日までに、いつか生徒とともにこの文章と真摯に向かい合い、教室での読みを共有し合いたいと願いつづけてきた。しかし、この文章は長文であり難解でもあり、高校の教材とするには無理があると判断し長い間諦めてきた。今回の「漢文講読」の受講者（二〇〇二年度・高三生）の一学期の学習意欲や態度

に励まされて長年の夢であった『報任少卿書』を、教室の教材として読むことが実現できた。実際の授業では、生徒の負担や言語抵抗を取り除くために、訓点を施し、難解な漢字には読み仮名を付した教材を用いた。段落番号は、授業展開の便宜を考慮し任意につけた。授業は、基本的に一段落一時間とした。生徒には、『報任少卿書』文章中に記される人物の注、通釈、書き下し文、試験勉強用の白文等を資料としてプリントし配布した。(紙数の都合で省略。白文のみ〔資料・教材〕として末尾に掲載する)。

近臣たちが悉く武帝に阿諛^{あいつ}追^お従^{じよう}し、李陵を非難する中で、「古の名将と雖も、過ぐる能はざるなり」と李陵を弁護した司馬遷は、死刑よりも「最下」の「腐刑」、つまり、「宮刑」の処断を受け、次いで「蚕室」に送られ「天下の観笑」とせられる。にもかかわらず、司馬遷は、生き恥を曝し、恥辱の中で生き抜き『史記』を完成させた。『報任少卿書』には漢字「辱」が頻出する^④。この「辱(垢)」の頻出は、司馬遷の悲しみが大なるものであったことの証左である。この教材を用いた授業の眼目を、汚辱の中を生き抜いて『史記』完成に向けた司馬遷のエネルギーの源と、彼の生の重みを生徒に伝えることにおいた。時間的な制約もあり、用意した教材の三分の一しか教室で扱うことができなかった。

以下、授業で扱った部分(〔資料・教材〕の六・七・八・九・十

二・十三の段落)の教材分析と授業の重点を記す。他の部分には中国古代の人物や難解語が頻出し複雑な構文もある。授業での説明が煩瑣になること、また、生徒の負担や授業時間を考慮し断念した。

二 『報任少卿書』の教材分析と授業の重点

(一) 第六段落―司馬遷の李陵評価

―この段落を、授業の「導入」として設定した―

ア 教材分析

「趣^{しゆ}舎^{しか}路^ろを異にし」、つまり武官李陵と文官司馬遷には親密な交際はない。にもかかわらず、何故に司馬遷は李陵を弁護し「最下」の「腐刑(宮刑)」に処せられたのであろうか。

この段落には、司馬遷の「李陵」の人間性に対する評価が記される。「僕其の人と為りを観るに」以下、司馬遷は李陵の長所を列挙する。今日の状況と連結する時、「自守の奇士にして」と「財に臨んで廉、取与に義あり」の語を深く読みたい。司馬遷は、「軀を全うし妻子を保つる臣」が、武帝に「其の短(李陵が匈奴の捕虜になったということ)を媒^{ばい}薬^{やく}(言い広めること)する」という状況に対して、「私^{ひそ}に之^{しか}を痛む」のである。生起する現象の中から真実を見極め、本来的な「義」を見据える司馬遷の伶俐な思想がうかがえる。

イ 授業の重点

①司馬遷と李陵の関係：「素より能く相善きに非ざるなり：慙懃いんけんの余よに接せず」から、両者が親密な関係ではなかった点をおさえる。

②司馬遷の李陵評価：「僕其の人と為りを観るに：国士の風有りとせず」の中の、「自守の奇士」「財に臨んで廉、取与に義あり」の語を、現代状況・現実の実相と絡ませて読む。

(二) 第七段落—李陵と部下の匈奴との戦い—

ア 教材分析

この段落には、李陵と彼の部下の悲劇的な戦いが記される。前教材「蘇武持漢節」には、具体的に記されなかった李陵の奮戦が記される。

李陵は「五千」に満たない「歩卒」を率いて匈奴の地深く攻め、一時は単于（匈奴の王）軍を蹴散らし、「旃裘せんきゅうの君長くんちやう」を「震怖」させる。匈奴は「一国」をあげて、李陵軍を包囲する。「救兵」の来ない李陵軍は、やがて壊滅する。李陵の名将ぶりは「陵一たび呼よびて勞れうらへば、起ちて、躬みづかり流涕りゅうていし：」以下、部下の戦いぶりによって証明される。前段落の「軀みを全うし妻子を保つたもつつの臣」と対照的な李陵像を、司馬遷は記す。緒戦における李陵軍勝利の報に接した「公卿王侯」は、武帝に「觴しやうを奉り寿をたもつつ上る」。やがて李陵軍の

「敗書（敗戦の報）」に接した武帝が、機嫌を損ねると、大臣たちは、「出づる所を知らず（為すすべも知らずにうろたえる）」という状態に陥る。司馬遷は、武帝の顔色をうかがい逆鱗ぎやくりんに触れまいとする「公卿王侯」、「大臣」たちの主体性のなさ、彼らのご都合主義を冷徹に見つめる。

イ 授業の重点

①戦場の読み：李陵軍と匈奴軍の戦闘を形象豊かに読む（文字化されていらないものをイメージして読む。「五千」の「歩卒」の一人ひとりが、かけがえない「命」であることを読む。

②李陵と武帝側近の「公卿王侯」・「大臣」の決定的な差異を読む。

③李陵と武帝側近の差異を見据える司馬遷の思想性（学者・歴史家として真実に責任を持つ良心）について考察する。

(三) 第八段落—李陵を弁護した司馬遷は誣告罪に—

ア 教材分析

この段落においても、司馬遷は李陵に対する高い評価を表明する。前段落に記された李陵の部下の死力を尽くした奮戦は、「甘きを絶ち少なきを分かち、能く人の死力を得」たからだとする。そして李陵を「古の名将と雖も、過ぐる能はず」と絶賛する。さらに司馬遷は、李陵が「陥敗かえはすと雖も」、「其の当を得て（機会を得て）」、「漢に報ぜんとす」る望みを抱いていると推測する。しかし事態は

「奈何」ともし難い。李陵が「陥敗」した事実は動かすことはできない。それでもなお、司馬遷は、「功亦以て天下に暴すに足る」と、李陵の功績を主上（武帝）に伝え、「唾眦の辞を塞がんと欲する（くだらない怨嗟の言葉を武帝の耳に入れてさせまいとする）」のである。この司馬遷の思いは受け入れられず、かえって「上を誣ふ」とされ誣告罪に問われる。

イ 授業の重点

①「身は陥敗すと雖も、彼其の意を観るに、且に其の当を得て漢に報ぜんと欲す」の文から、捕虜となった李陵の心中に対する司馬遷の推測について考察する。前教材『蘇武持漢節』の「曹柯の盟ひ^⑤」と関連づける。

②司馬遷の李陵に対する「功亦以て天下に暴すに足る」という評価から、客観的現実を見極めようとする歴史家（学者）の本質を読み取る。

③司馬遷の「拳拳の忠（一途な忠義の心）」は無視され、のみならず誣告の罪で獄に繋がれる。この点から司馬遷の李陵弁護が、命がけの行為であったことを確認する。

（四）第九段落―孤立無援の司馬遷。宮刑そして蚕室へ―

ア 教材分析

第九段落は、獄に繋がれた司馬遷の孤立無援の状況、孤独な心境

について「任少卿」に書き綴った段落である。

段落冒頭の「家貧しく、貨賂以て自ら購ふに足らず：」以下、「深く圜れいの中に幽せられる。誰にか告過すべき者ぞ」に、当時の司馬遷の孤立無援の状況と孤独な心境とが記されている。司馬遷はこの時の苦悩を、「此れ真に少卿の親ら見る所、僕の行事豈然らざんとや」と、死刑を待つ身の任少卿に「貴方にはわかつてもらえはすだ」と訴えるのである。司馬遷は、李陵の運命と自己の運命を重ね合わせ、「李陵既に生きて降り、其の家声を隕す。而して僕亦蚕室に之き、重ねて天下の観笑と為る」と悲嘆する。「蚕室」は、「宮刑」に処せられた者が身柄を移される所であるという。しかし、司馬遷は、「天下の観笑」の中を生き残った。司馬遷は「恥」を知らぬ人間なのであろうか。

続く「悲しきかな」のリフレインは、まさしく、司馬遷の絶望的叫びである。段落最後の「事は未だ二俗人の為に言ひ易からざるなり」の一文は、周囲の者に自己の心情が理解されない絶望的諦念の表出であらう。「俗人」とは、第六段落の「軀を全うし妻子を保つおとの臣」、第七段落の「公卿王侯」・「大臣」、その他武帝に阿る人々を指すのであろう。

イ 授業の重点

①李陵を弁護したがゆえに、「深く圜」に幽閉され、自分の心

中を誰にも訴えることのできない司馬遷の痛憤を深く読む。

② 「俗人」を明確にし李陵との相異点を考察する。「家声を隕す」の内容を、前教材『蘇武持漢節』『陵の家を収族し、世の大戮と為せり』を想起し、関連させて読む。

③ 「蚕室」に移されるという意味について考える。

第十段落に「恥」が列挙されるが、司馬遷は「最下は腐刑（宮刑）に極まれり」とする。第三段落にも「誦は宮刑より大なるは莫し」とある。第三段落には、雍渠・景監・趙談の宦官を列挙し、「宦豎に関する有れば、傷気せざる莫し（宦者と関与する場合には、気分を損なわない者はいない）」と記し、「宮刑」に処せられた自分と重ね合わせている。武帝治世下の宮廷において、司馬遷は、真実を洞察し、ただ一人李陵を弁護したがゆえに、「最下」の「腐刑」に処せられたのである。

（五）第十二段落

——最大の「誦」、「宮刑」に耐えて司馬遷が生き延びた理由——

ア 教材分析

第九段落で、「宮刑」を受けた自己、「天下の観笑」となった自己を、「悲しきかな」と絶叫した司馬遷は、この段落において、汚名を着せられた中を生き長らえた理由について記す。

「僕は怯懦にして苟くも生きんと欲すと雖も、亦頗る去就の

分を識る」の一文で、司馬遷は、自己を「怯懦」としながらも、明確に「去就の分を識る」と記す。つまり、自己の身の処し方は知っているとする。ついで、「何ぞ自ら縲泄の辱めに沈溺するに至らんや（どうして縄目を受ける恥の中に自らすすんで身を沈めるででありましょうか）、と任少卿に訴える。自分には「已むを得ざる」理由があったから、「引決」（責任を負って自決すること）しなかったのだと訴えるのである。その「已むを得ざる」理由が、この段落の最後の文に表明されている。この文は長文である。

「隠忍して苟くも活き糞土の中に幽せられて、辞せざる所以の者は、私心の、尽くさざる所有り、鄙陋にして世を没し、文彩の後世に表れざるを恨めばなり。」

——線を施した部分に、司馬遷が「引決」しなかった根拠が表出している。

「文彩」を「後世」に表したいという司馬遷の思いは、父談の遺命を守り、親子二代に渡る『史記』完成への決意と「みずから生きてあったことの証」を示すものであったのである。「最下」の「腐刑の「辱（垢）」を曝しながらも、司馬遷は『史記』完成の一念で生き延びたことを「任少卿」に訴えるのである。『史記』完成に向けて生き抜いた司馬遷の生の重みを深く読みたいものである。

イ 授業の重点

①二度繰り返される「已むを得ざる」が、どういう場合に用いられているか。

前者は、段落冒頭の一般論を受けて「義理に激する者」の場合に用いられている。格別親密でなかった李陵を弁護した行為は、この前者の「已むを得ざる」「義理」のためのものであったのだろう。後者の「已むを得ざる」は、「宮刑」を受けてもなお汚名の中で生き続けたことであろう。彼は、「文彩」を「後世」に残すために生き延びたのであると任少卿に訴えるのである。

②「縲泄の辱め」・「糞土の中に幽せられて」の語句から、司馬遷の心中を読み取る。真実を見抜いたために「義理に激」し、李陵を弁護した舌禍事件によって「宮刑」に処せられ「蚕室」に身柄を移された孤独な幽閉生活。司馬遷を襲った悲劇性、彼の憤りをこれらの語句から読み深める。

③この世に生を受けた者の存在証明としての「文彩（『史記』）」の完成に向けた司馬遷の情熱を深く読む。

(六) 第十三段落「聖賢」の「発憤」に自己を重ねる司馬遷―

ア 教材分析

今回の授業の最後（「漢文講読」の最後、したがって高三の授業の最後となる）の教材として、この第十三段を設定した。この段落

には、仲尼（孔子）・孫子・韓非等、生徒に馴染みのある人物たちの書物が列挙される。

この段落の冒頭で、司馬遷は、「古者富貴にして名の摩滅するものは数え切れないが、唯だ憫儻非常の人（常人と異なり、並外れて優れた人）、称せらるるのみ。」と一般論を記す。ついで「憫儻非常の人」の具体例として、「文王」以下の人物を列挙し、これらの「聖賢」は「発憤」して書物を残したとする。心に「鬱結」したものを抱きながら、それを表出する機会がなかったために、そこで、「往事（過去）」を述べ、来者（未来）」を思い描いたと述べる。彼らは、世の無用の者となり、「表舞台から」退きて書策を論じ（議論を發し）、「其の憤りを舒べ」、「空文を垂れ、以て自ら見さん（自己の文章を書き残すことで、己の存在を世に示そう）」としたと結論する。

司馬遷は、自己を襲った過酷な運命に抗して、「聖賢」に学び鼓舞されて、「発憤」の書、『史記』を完成させたのである。

イ 授業の重点

①「憫儻非常の人」とは、いかなる逆境にあっても、自己と他者の生、何よりも己に対して誠実であり続ける人であることを学ぶ。

それが「義」の本質であることを学ぶ。国家に対する皮相な「忠義」、上司や先輩に対する無条件な迎合は真の「義」とはおよ

そ無縁のものであることを学ぶ。

②「義」の人、司馬遷の生のありようを、読者である自己と重ね合わせて読む。

第十四段落の「僕誠に以て此の書を著し、諸れを名山に蔵し、之を其の人、通邑の大都に伝へば、則ち僕前辱の責を償ふ、万戮せらるると雖も、豈悔ゆる有らんや。」、第十五段落の「百世を累ぬると雖も、垢はいよいよ甚だしきのみ。是を以て腸は一日に九廻」するという司馬遷の苦悩と悲嘆を深く読む。さらに、「死するの日にして、然る後は非乃ち定まる（私が死んでから、その後には是非は決定する）」という司馬遷の声を、全身で受けとめる（読み）の授業を構築したい。

時間的制約があり、授業ではこの第十三段落までしか読めなかった。続く第十四・十五段落の通釈を読み、内容を概括的に説明して授業を終了した。

三 授業記録

（紙数の都合で導入の第六段落のみ記す）―一部―

第六段落の授業記録（以下、加藤はT、生徒の名は最初の漢字をアルファベットで記した。）

T わし、この「報任少卿書」、この教材、君らが小学校校生の頃

から、十年も前から、いつか授業で読もうと準備してきたも
んやねん。内容、難しいし、長文やし、わしも、今もわか
へんとこ、いっぱいあるんや。長い間、わし、諦めてたんだ
けど、一学期からの君らの勉学意欲に励まされたから、思い
切つてやることにするわ。十年も待ち続けた理想の恋人にや
つと会えた気がするわ。（笑い）。わしの知つてる範囲では、
これ、日本の高校生で読んだもん、まだ、いないと思う。日
本の高校国語教育史上、初の快挙。わしと、一緒に苦勞しな
がら読んでみるか。「乗り越える壁は厚く高い方がいい」、諦
めて厚く高い壁に挑戦してみるか。（笑い）。こないだまでや
つてた「蘇武持漢節」の蘇武や李陵、彼らと同時代を生きた
司馬遷。司馬遷、知つてるわな、「史記」を書いた人。その
司馬遷が死刑を宣告された友人「任少卿」に書いた手紙が、
この文章やねん。わし、司馬遷に惚れてんねん。この人、ほ
んまにすごい。実際に出会ったことないけどな。「宣と遷」
（板書、この二人、わしの惚れてる人やねん。「宣」は「山本
宣治」（板書）、略して「山宣」。我が同志社の誇る偉大な先
輩、もう一人が司馬遷や。何、「山宣」、知らん、「山宣」知
らんで、君ら、同志社、もぐりちゃうか。（笑い）。戦前、悪
名高い「治安維持法」に帝国議会で、たった一人反対した人

物。帝国議会で反対演説をして宿に帰った晩、山宣、待ち伏せしていた暴漢に襲われ、短刀でめった切りになされて暗殺されたんや。生物学者としても有名、日本で初めて「性教育」の重要性を主張した人物。山宣、そのくらいにしておくわ。

残りの授業時間を計算すると、「報任少卿書」全部読み切れないんで、中途半端で、申し訳ないけど、プリントの第六・七・八・九・十二・十三段落をやることにする。じゃあ、教材を読む前に、第六段落、十の文でできている。文の冒頭に番号記してくれるか。じゃあ、第一の文、読んでみるわな。

(T 第一の文を読む。) 何か、質問ないか。「僕」は司馬遷のこと。李陵と司馬遷の時の漢の皇帝は、誰やった？ Suくん。

S u 武帝、ですか。

T そう、正解。次の第二の文には、司馬遷と李陵の関係が書かれている。じゃあ、二人はどういう関係だったか、読むから考えてくれるか。(T 第一の文を読む。) 二人の関係は……

O k 親しくなかった。

T もともと、親密な関係ではなかったんやな、この二人は。第三の文に、親しくなかった様子が、少し具体的に出てくる。

次の文、上・中・下点があつて難しいかもしれんが、K o k

ん、がんばって読んでくれるか。(K o 第三の文を読む。)

T 再読文字もきちんと読めてる。ここ、難しい言葉、あるかな。段落の前の方から順番に言ってくれんか。

F u 「趣舎路を異にし」。

T そのほかには？ ないか……

H i 「慇懃の余權に接せず」。

T もういいかな。「趣舎路を異にし」は、二人の目指すもの、道が違う、ということ。司馬遷は「文官」(板書)、李陵は

「武官」(板書)。武帝の臣下であっても二人の住む世界が違

ったわけや。その後の「未だ嘗て盃酒を衞み」以下、質問に出た「慇懃の余權に接せず」も、あわせて説明してしまうと、

「二人は目指すものが違ったために、これまで一緒に盃を傾け酒を酌み交わしたりして、親しい交わりを持ったことはなかった。」ということやな。君ら、ラグビー部やサッカー部の者と、吹奏楽部や書道部の者とが、酒を飲んで親しく話したことあるか。ないわな。アルコール、まだ、アカンけどな。

F u k u n、水泳部、大丈夫やろな。(笑い)。H i k u n、いいかな。二人は、親しい関係ではなかった。これ、もう一度、確認しておくわな。第三の文の冒頭の「然れども」、逆接やな、「そうだけれども」(板書)、「そう」は、指示語やから、

具体的には「司馬遷は李陵と親しくなかつたけれども」となる。以下、第四の文から第七の文まで、司馬遷の「李陵に対する人物評価」(板書)が記されているんや。四つの文、まとめて読むから、意味不明の語句をチェックしてください。(T 第四の文から第七の文まで読む。) 第四の文、わからない言葉、出してくれるか、誰からでも自由に……

I m 「自守の奇士」と「財に臨んで廉」。(T そのほかは?)

K i 「取与には義あり」。

T そのほか、もうないかな。質問に答える前に、「僕其の人と為りを観るに」について、説明しておきます。「私が李陵という人を見たところ」となります。じゃあ、「自守の奇士」からいこうか。「自守」は、自己に厳しくするということ。

「奇士」の「奇」は、第八の文の終わりにもう一度出てくる。そこ、丸で困んどいてくれるか。李陵の人物評価のキーワードやねん。I mさんの質問はどちらも大切。「奇士」の「奇」は、今の「奇妙」という意味ではない。奇妙な人、変な人じゃ、李陵がかわいそうちゃう。「奇」には「優れる」(板書)という意味がある。自らを厳しく律することのできる立派な人物。「親に対しては孝」、「士」は、「人」でいいかな、「人」に対しては誠実」であり、「財に臨んで廉」やな。「財」は

「金銭」。金銭に対しては「廉」。「廉」は「清廉潔白」(板書)

の「廉」。「廉」は、「いさぎよい」(板書)。つまり、「金銭」

感覚が清潔、ということ。どっかの国の、何とかという国会

議員や高級官僚とは決定的に違う。(笑い)。K iくんから出

された「取与には義あり」とも関係する。「取与」は、文字

通り、物事を取ったり与えたり、「金品の授受」(板書)とも

言う。「義」は正しい考えに基づいて、正しい行動を取るこ

と。I mさん、K Iくん、わかってくれたかな。いつか、

「浅田次郎の『壬生義士伝』」(板書)、読んでください。私は

それを読んで泣きました。そして「義」の意味、深く考えさ

せられました。第五の文、H aくん、もう一回読んでくださ

い。(H a第五の文を読む。) わからないこと、あつたら出し

てください。

T a 最初の方、「分別には譲る有り。恭儉にして人に下り」の

と……

T そこ、ちょっと難しいわな。「分別」と「恭儉」……「分別」

は、人と「分かち合うこと」。「恭儉」は、「謙虚な態度」(板

書)。この文の主語は李陵だから、李陵は物を人と分かち合

う時には人に譲り、謙虚な態度で人に対してへりくだり……ぐ

らいかな。T aさん、いいですか。

Ok その後も、説明して下さい。

T この「国家の難」って、具体的に何やる？

Ok 匈奴との戦い。

T そういうことやな。李陵は、物事を人に譲り、謙虚な人柄だが、一旦大事な事があつたら奮起して我が身を捨てて事当たる。匈奴との戦いが、この場合、具体的には「国家の難」ということになる。Okくん、これでいいか？ 第六の文、

「其の素より蓄積する所なり。」これ、短いけど、重要。「蓄積」は、蓄えること。「知識の蓄積」(板書) 使って使うやろ。

ここも主語は李陵だから、前の文、というより、司馬遷のとらえた李陵の長所全体を受けて、李陵の長所、人となりは前々から蓄えてきたものである、という意味になる。簡単にできあがったもんじゃない、と言ってるわけや。何事も「蓄積」が大事。テストの結果も、「日頃の蓄積」が大事；嫌味です。(笑い)。次の第七の文は、司馬遷の李陵評価の結論が漢字二字で表されている。Okくん、わかりますか。その漢字二字。

Ok 「国土」。

T そう、麻雀する人は「国土無双^②」、すごい役って知ってるわな。「国土」というのは、「その国で最も優れた人・国のため

に身をささげて尽くす人」のこと。司馬遷は、李陵を「国土」の風格を持つっていると評価している。第八の文の「万死^{ばいじ}に出でて一生の計を顧みず」という人が「国土」。そういう人を、司馬遷は、さらに「奇なり」としてるんや。前に丸してもらったけど、ここに二度目の「奇」が用いられている。「奇」の意味、前、「自守の奇士」でやったから確認してくれるか。

Ka 先生、「万死に出でて一生の計を顧みず」が、はっきりわからないんですが。

T それ、わかりにくいわな。死にもぐるいで、自分のことなど考えないで。わかる？ 「公家の難」、これは、前に出てきた「国家の難」と同じ意味。「国家の危機」に際して、自分のことを考えずに、全力で立ち向かうこと、いいかな。誤解が生じるといけないから、言ってしまうけど、今は、国家のためというより、家族や親しい人のために。そうでないと、戦前みたいな危険なことになる。自分や身近な人を大事にしないのは、最低。今は、一人ひとりの命が大事。これ、加藤の考え、押しつけるつもりはない。ラストの第九と十の文、やつつけようか。「国土」の李陵と反対の立場の人間、Arくん、わかるかな。

A r 「軀を全うし妻子を保つ臣。」

T 「我が身を大事にして妻子とぬくぬくとしている臣下」という意味やけど、これ、現代では大切にしなければダメやぞ。

「妻子」を大事するのは、今は大事やぞ。ここでは、武帝の顔色を窺って、みんなで李陵の悪口を言う人、ぐらいいの意味。いくさ場の現場や李陵と部下の戦いぶりを知らない人が、あれこれと欠点を言いふらしていることに対して、司馬遷は心を痛める、ということ……Y aくん、「今事を拳おこなひて一たび当たらず」のとき、自分の言葉で言ってみてくれるか。主語を補って……

Y a 李陵が、匈奴と戦って、一回負けた。

T そうやな。次の第七段落に、李陵と部下たちの戦いぶりが記されるから、次の時間で、それを丁寧に読むことにする。今は、安全な所にいる人たちの李陵非難に対して、「僕誠に私かに心に之を痛む」。武帝側近の者たちの李陵に対する悪評に対して心を痛めている点を確認して、今日の授業、終わろうか。「後略」

※第十三段落を読む授業（最後の六時間目の授業）では、残り時間二十分ほどで、第十四・十五段落の「通釈（生徒に授業資料として配布した）」の概略を説明し、「太史公自序」（一部をプリントし、

合わせて読み、次の三点を中心に「史記」に対する司馬遷の思い入

れを説明した。（第十三段落の「教材分析」と「授業の重点」参照）。

①「草創未だ就ならざる、會々なまたま此の禍に遭ひ、其の成らざるを惜しむ。」（第十四段落）。

▼「太史公自序」…「遷、俯して流涕して曰く、小子不敏なるも、請ふ悉く先人の次する所の旧聞を論じ、敢へて闕かざらん。」

②「僕、誠に以て此の書を著し、諸れを名山に藏し、之を其の人通邑ゆうの大都に伝へば、則ち僕、前辱の責を償ふ、万、戮せらるると雖も、豈悔ゆる有らんや。」（第十四段落）。

▼「太史公自序」…「之を名山に藏し、副は京師に在り。後世の聖人君子を俟つ。」

③「誦はは彌々甚だしきのみ。是を以て腸は一日に九廻し、居りては則ち忽忽として亡うしなふ所有るが若く、出でては則ち其の往く所を知らず。毎に斯の恥を思へば、汗の未だ嘗て背に発し衣を沾さずんばあらざるなり。」（第十五段落）。

▼「太史公自序」…「凡そ百三十編、五十二万六千五百字、太子公書と為す。序略は、以て遺を拾ひ、芸を補ひ、一家の言を成す。厥は六経の異伝を協せ、百家の雑語を整斎す。」^⑨

まとめ風

年度初めの四月、生徒に初めて接する時、何年教師稼業をしていても緊張する。無事にこの一年過ごせるだろうか、授業が成立するだろうかという危惧を抱えて教室に向かう。生徒の生きている現実や生きていく未来に切り結ぶ授業、生徒の真に求める授業に応えられるかという不安を抱いて教室に向かう。毎年、そういう危惧や不安を抱いて、教室に足を運び続けて三十年以上「教師稼業」を続けてきた。今回の「高三選択『漢文講読』」の教室に向かう時、危惧と不安は例年以上に大きかった。初めて接する生徒たちの、「漢文講読」に対する思いや期待がどのようなものであるのか、皆目見当がつかなかったからだ。一学期前半は、手探り状態で、陶潜の「五柳先生伝」から開始し、続いて『帰去来辞』を中間考査までに読んで、一学期後半は、年代的順番を入れ替え、柳宗元の『捕蛇者説』を先に読み、続いて韓愈の『師説』を読んだ。生徒の学習意欲に励まされて、二学期は高校の教材としては長文の、『蘇武持漢節』と『報任少卿書』に挑戦した。武帝治世の同時代を生きた、蘇武・李陵・司馬遷の生き様や命の重みを生徒たちに伝え、生き難い現実と未来を生きる生徒に、自分の羅針盤を見つけてほしいと願ったからである。『報任少卿書』は、まもなく死刑に処せられる友人、「任少

卿」に、司馬遷が痛切な思いを書き送った手紙である。司馬遷の『史記』の一部は教科書に掲載されている。が、同じ作者の『報任少卿書』はあまり知られていない。私は、十数年前から、司馬遷のこの文章を教室で読むことを夢見てきた。今回、生徒に励まされて、その一部ではあるが、教室で読むことが実現した。この教室のへ読み)の営みを通して、生徒の伸びようとする力、向上心が計り知れないものであるということも実感できた(「漢文購読」受講の生徒の授業に対する批判・感想を寄せてもらったが、紙数の都合で省略)。生徒諸君とともに充実した学びの時と空間を共有することができた。「漢文講読」受講の生徒諸君に心から感謝の意を表したい。

注

- ① 『高等学校学習指導要領解説国語編』(平成十一年十二月 文部省) 第1章総説 第1節国語科改訂の趣旨
- ② 『高等学校学習指導要領 第1章総説 第2款「各教科・科目及び単位等」(平成十五年実施) において、国語科の必修科目は、「国語表現Ⅰ」(2単位)、「国語総合」(4単位)と定められた。また注①の「高等学校学習指導要領解説国語編」(平成十一年十二月 文部省)は、「第1章総説第3節国語科の科目編成」で、国語表現Ⅰを「従前の『国語表現』及び『現代語』の内容を再構築して新たに設けた必修科目」とし、「国語総合」は「総合的な言語能力の育成を旨指し」た必修科目であるとする。「国語総合」においては、「古典と近代以降の文章との授業時間

の割合はおおむね同等」、「古典における古文と漢文との割合は、一方に偏らないようにすること」と時間配分を規定する。この規定を遵守すれば、古文（日本古典）と漢文の授業時間は必修一単位となり、「古典」軽視の傾向は明確である。

③ 夏目漱石「現代日本の開化」（『漱石全集』第十一卷・岩波書店・昭和四十一年版・三四〇ページ）「：自然天然に発展して来た風俗を急に変える訳にはいかぬから、ただ器械的に西洋の礼式杯を覚えるより外に仕方がない。自然と内に発酵して醸された礼式でないから取ってつけた様で甚だ見苦しい。是は開化ぢやない、開化の一端とも云へない程の些細な事（肉刺や小刀の持ち様）であるが、さういふ些細な事に至るまで、我々の遣っている事は内発的でない、外発的である。是を一言にして云へば現代日本の開化は皮相上滑りの開化であると云ふ事に帰着するのである：」（一）内の注・傍線は加藤が記した。（以下同じ。）この漱石の「開化」に対する批評は、今日の状況を見据える視点として、なお有効性を發揮するものであると考える。

④ 「資料・教材」第十一・第十四・第十五段落に漢字「辱」が記される。「辱」と同意の「垢」も第三段落「垢莫大於宮刑」、第十五段落に「垢弥甚耳」と記される。（傍点は加藤）

⑤ 「史記」『列伝』第二十六、「刺客列伝」には、春秋戦国時代の五人の刺客の伝が記される。その冒頭に「曹沫（ソウマツ、ソウクワイとも）の伝記がある。魯の莊公は曹沫を將軍の地位に留まらせる。斉に敗れた魯の莊公は、「遂邑」の地を割譲することで和睦を申し入れた。斉の桓公と魯の莊公が、和睦の盟約を「柯」の地で結ぼうとした時、曹沫は、桓公に「匕首」を突きつけ、斉が奪った魯の土地の返還を迫った。桓公は、やむを得ず「乃許尽歸魯之侵地（乃ち尽く魯の侵地を帰すことを許す）」と約束したのである。曹沫が柯の地で、莊公の恩義のために、桓

公に魯の土地返還を盟約させた故事を「曹柯の盟ひ」という。匈奴の捕虜となった李陵が、武帝（漢）のために曹沫に匹敵するような働きを心に秘めていたことを漢に戻っていく蘇武に語る場面に見える。（『資治通鑑』「蘇武持漢節」参照）。

⑥ 林田慎之介『中国の人と思想 司馬遷●起死回生を期す』（集英社）教材解釈や教材分析に多大の示唆を受けた。

⑦ 「史記」『列伝第三十二』「淮陰侯列伝」は、漢成立の功労者「韓信」の伝記である。漢王（劉邦）は、丞相蕭何の韓信推荐にもかかわらず重用しなかった。韓信は、漢王の許を逃亡する。単身、蕭何は韓信を迫り、戻った蕭何は漢王に意見する。蕭何は「国士無双」の語を用いて、漢王に韓信の重用を迫る。蕭何は、「：信の如き者に至りては国士無双、王必ず長く漢中に王たらんと欲せば、信を事ひる所無し。必ず天下を争はんと欲せば、信に非ざれば、与に事を計る所者無し。王の策を顧みるに、安れの所にか決せん」と、漢王の「東方」支配のためには、韓信が不可欠な人物、「国士無双」の人物であると重用することを漢王（劉邦）に進言した。

⑧ 「史記」『太史公自序』に、孔子の『春秋』に対する司馬遷と上大夫壺遂との問答の記事がある。壺遂の司馬遷への質問の中に「：孔子の時、上、名君なく、下、任用を得ず。故に春秋を作り、空文を垂れて、以て礼儀を断じ、一王の法に当つ：夫子（司馬遷）の論ずる所は、以て何を明らかにせんと欲する」とある。なお、壺遂は、司馬遷とともに太初改暦に従事したとされる人物であり、彼の誠実・清廉な人柄に対して、司馬遷は、敬意を抱いていたとされる人物である。

⑨ 注⑥に同じ。

林田氏は、「五十二万六千五百字」を刻んだ司馬遷の努力について、次のように記す。

「この壮大な歴史記録が綴られたのは、紙ではない。竹簡、ないしは木簡である。それは、幅が二・三センチメートル、長さ三〇センチメートルほどの大きさの竹札か、木札であって、普通そこには、二十字か三十字を記すことができた。：司馬遷が『史記』を著すにあたって、目をとおした資料も、木簡・竹簡に記されていた。膨大な資料が山積みになって：必要な資料をさがして取り出す作業だけでも、たいへんな努力であった。そればかりではない。司馬遷の机の周辺には、『史記』を記録していく札簡が用意されていて、これまた山積みになっていたと想像される。書き改めたり、補筆したりするさいには、墨で書かれたその部分の文字を、削りとらねばならぬわけで、札簡に書くことそれ自体が、現代人の想像する苦行であった。」

林田氏のこの言を参考に、『史記』完成に向けた司馬遷の肉体的・精神的努力が、現代人の原稿用紙やノートに字を記すこととは決定的に異なるものであることを生徒に語った。

〔資料・教材〕『報任少卿書』

〔文選〕「文章篇」中 新釈漢文大系 明治書院

田 太史公牛馬走司馬遷、再拜言、少卿足下、曩者辱賜書、教以順於接物、推賢進士為務。意氣勤懇懇懇、若望僕不相師、而用流族人之言。僕非敢如此也。僕雖罷駑、亦嘗側聞長者之遺風矣。顧自以為、身殘處穢、動而見尤、欲益反損、是以獨鬱悒、而與誰語。諺曰、誰為為之、孰令聽之。蓋鍾子期死、伯牙終身不復鼓琴。何則士為知己者用、女為說己者容。若僕大質已虧欠矣。雖才懷隨和、行若田夷、終不可以為榮。適足以見笑而自黜耳。

田 書辭宜答、會東從上來、又迫賤事。相見日淺、卒卒無須臾之間、得竭志意。今少卿、抱不測之罪、涉旬月、迫季冬。僕又薄從上雍。恐不然

不可為諱。是僕終已、不得舒憤懣、以曉左右、則長逝者魂魄、私恨無窮。請略陳固陋。闕然久不報、幸勿為過。

田 僕聞之、修身者智之符也。愛施者仁之端也。取与者義之表也。恥辱者勇之決也。立名者行之極也。士有此五者、然後可以託於世、而列於君子之林矣。故禍莫僊於欲利、悲莫痛於傷心、行莫醜於辱先、誦莫大於宮刑。刑余之人、無所比數、非一世。所從來遠矣。昔衛靈公、与雍渠同載、孔子適陳、商鞅因景監見、趙良寒心。同子參乘、袁絲变色。自古而恥之。夫以中才之人、事有關於宦豎、莫不傷氣。而況於慷慨之士乎。如今朝廷、雖乏人、奈何刀鋸余、薦天下豪俊哉。

田 僕賴先人緒業、得待罪鞶轂下、二十余年矣。所以自惟、上之不能納忠致信、有奇策才力譽、自結盟主。次之又不能拾遺補闕、招賢進能、顯巖穴之士。外之又不能備行伍、攻城野戰、有斬將奪旗之功、下之不能積日累勞、取尊官厚祿、以為宗族交遊光寵。四者無一遂、苟合取容、無所短長之效、可見如此矣。嚮者、僕常廁下大夫之列、陪外廷末議、不以此時引維綱、尽思慮。今以虧形為掃除之隸、在、茸之中、乃欲仰首伸眉、論列是非。不亦輕朝廷、羞當世之士邪。嗟乎、如僕尚何言哉。尚何言哉。

田 且事本末、未易明也。僕少負不羈之行、長無鄉曲之譽。主上幸以先人之故、使得奏薄技、出入周衛之中。僕以為載益何以望天。故絕賓客之知、亡室家之業、日夜思竭其不肖之才力、務一心當職、以求親媚於主上。而事乃有大謬不然者夫。

田 僕与李陵、俱居門下。素非能相善也。趣舍異路、未嘗銜盆酒、接慰勸之余權。然僕觀其為人、自守奇士、事親孝、与士信、臨財廉、取与義。分別有讓、恭儉下人、常思奮不顧身、以殉國家之急。其素所蓄積也。僕以為有國士之風。夫人臣、出万死不顧一生之計、赴公家之難、斯以奇矣。今舉事、一不当、而全軀保妻子之臣、隨而媒孽其短。僕誠私心痛之。

田 且李陵提步卒、不滿五千。深踐戎馬之地、足歷王庭、垂餌虎口、橫

挑僮胡、仰億萬之師、与单于連戰十余日。所殺過半當。虜救死扶傷不給。旃裘之君長、咸震怖。乃悉徵其左右賢王、拳引弓之人、一國共攻而閉之。輒闢千里、矢尽道窮、救兵不至、士卒死傷如積。然陵一呼、勞軍士無不起、躬自流涕、沫血飲泣、更張空拳、冒白刃、北嚮爭死敵者。陵沒時、使有采報。漢公卿王侯、皆奉觴上壽。後數日、陵敗書聞。主上為之、食不甘味、聽朝不怡。大臣憂懼、不知所出。

〔四〕僕竊不自料其卑賤、見主上慘憤悼悼、誠欲效其款款之愚、以為、李陵素与士大夫、絕甘分少、能得人死力、雖古之名將、不能過也。身雖陷敗、彼觀其意、且欲得其當、而報於漢。事已無可奈何、其所催敗、功亦足以暴於天下矣。僕懷欲陳之、而未有路。適會召問、即以此指推、言陵之功、欲以広主上之意、塞眦眦之辭、未能尽明。明主不曉、以為、僕沮貳師、而為李陵遊說、遂下於理。拳拳之忠、終不能自列。因為誣上、卒從吏議。

〔五〕家貧、貨路不足以自贖、交遊莫救、左右親近、不為一言。身非木石、独与法吏為伍、深幽囹圄之中。誰可告過者。此真少卿所親見、僕行事豈不然乎。李陵既生降、隳其家聲。而僕又倖之蚕室、重為天下觀笑。悲夫、悲夫。事未易一二為俗人言也。

〔六〕僕之先、非有剖符丹書之功。文史星曆、近乎卜祝之間。固主上所戲弄、倡優所畜、流俗之輕也。假令僕伏法受誅、若九牛亡一毛、与螻蟻何以異。而世又不與能死節者、特以為智窮罪極、不能自免、卒就死耳。何也、素所自樹立使然也。人固有一死、或重於太山、或輕於鴻毛、用之所趨異也。太上不辱先、其次不辱身、其次不辱理色、其次不辱辭令、其次詘体受辱、其次易服受辱、其次關木索被箠楚受辱、其次剔毛髮、嬰金鐵受辱、其次毀肌膚斷肢體受辱、最下腐刑極矣。傳曰、刑不上大夫。此言士節不可不勉勵也。猛虎在深山、百獸震恐、及在檻穽之中、搖尾而求食。積威約之漸也。故有画地為牢、勢不可入、削木為吏、議不可對、定計於

鮮、今交手足、受木索、暴肌膚、受榜箠、幽於圜牆之中。當此之時、見獄吏則頭搶地、視徒隸則正惕息。何者、積威約之勢也。及以是言不辱者、所謂強顏耳。曷足貴乎。

〔十一〕且西伯、伯也、拘於羑里。李斯、相也、具於五刑。淮陰、王也、受械於陳。彭越、張敖、南面稱孤、繫獄抵罪。絳侯、誅諸呂、權傾五伯、囚於請室。魏其、大將也、衣赭衣、關三木。李布為朱家鉗奴。灌夫受辱於居室。此人皆身至王侯將相、聲聞諸國。及罪至罔加、不能引決自殺、在塵埃之中。古今一体、安在其不辱也。由此言之、勇怯、勢也、強弱、形也、審矣。何足怪乎。夫人不能早自裁繩墨之外、以稍陵遲至鞭箠之間、乃欲引節、斯不亦遠乎。古人所以重施刑於大夫者、殆為此也。

〔十二〕夫人情、莫不貪生惡死、念父母、顧妻子。至激於義理者不然。乃有所不得已也。今僕不幸、早失父母、無兄弟之親、独身孤立。少卿視僕於妻子何如哉。且勇者不必死節、怯夫慕義、何處不勉焉。僕雖怯懦欲苟活、亦頗識去就之分矣。何至自沈溺纒維之辱哉。且夫臧婢妾、由能引決、況僕之不得已乎。所以隱忍苟活、幽於圜牆之中而不辭者、恨私心有所不尽、鄙陋沒世、而文彩不表於後世也。

〔十三〕古者富貴而名摩滅、不可勝記。唯惆儻非常之人稱焉。蓋文王拘而演周易、仲尼厄而作春秋、屈原放逐、乃賦離騷、左丘失明、闕有國語、孫子膑脚、兵法脩列、不韋遷蜀、世世呂覽、韓非囚秦、說難孤憤、詩三百篇、大抵聖賢發奮之所為作也。此人皆意有鬱結、不得通其道。故述往時、思來者。乃如左丘無目、孫子斷足、終不可用、退而論書策、以舒其憤、思垂空文、以自見。

〔十四〕僕竊不遜、近自託於無能之辭。網羅天下放失旧聞、略考其行事、綜其終始、稽其成敗興壞之紀、上計軒轅、下至于茲、為十表、本紀十二、書八章、世家三十、列傳七十、凡百三十篇。亦欲以究天人之際、通古今之變、成一家之言。草創未就、會遭此禍、惜其不成。已就極刑、而無愠

色。僕誠以著此書、藏諸名山、伝之其人、通邑大都、則僕償前辱之責、雖万被戮、豈有悔哉。然此、可為智者道、難為俗人言也。

〔十五〕 且負下未易居、下流多謗議。僕以口語遭此禍、重為鄉党所笑以汚辱先人、亦何面目、復上父母丘墓乎。雖累百世、垢弥甚耳。是以腸一日而九廻、居則忽忽、若有所亡、出則不知其所往。每念斯恥、汗未嘗不浹背沾衣也。身直為閹閣之臣、寧得自引於深藏岩穴邪。故且從俗浮沈、与时俯仰、以通其狂惑。今少卿、乃教以推賢進士、無乃与僕私心刺謬乎。今雖欲自彫琢曼辭、以自飾、無益於俗、不信、適足取辱耳。要之、死日、然後是非乃定。書不能尽意。略陳固陋。謹再拜。

(旧漢字は常用漢字に改めた。)